

## 元気がでる農業 8

# ニワトリが育ててる有機レモン

瀬戸内海で、レモンの有機栽培を行なっているのが、泉精一さんだ。ひたすら土を作り、地域の産物を徹底的に利用し、ニワトリ飼育との循環型農業を成功させている。

金丸弘美

瀬戸内海の小さな島に住む泉精一

さんは、二五年前から無農薬無化学肥料の有機栽培による果樹栽培を続けている。八年前からは、不可能と言われたレモンの有機栽培に取り組み、成功させた。

愛媛県温泉郡中島町は、松山市の高浜からフェリーで約一時間ほど行った瀬戸内海の島である。周囲二八キロメートル、人口七二〇〇人、世帯数一七〇〇。島で暮らすほとんどの人が、ミカンや甘夏などの果樹による農業を営んでいる。

泉精一さん（七一歳）、嘉代美さん（六六歳）夫妻は、ミカン、甘夏、イヨカン、ポンカン、キヨミ、レモンなどの果樹類の栽培と、約八〇〇羽のニワトリを飼育する。果樹栽培とニワトリ飼育との、循環型農業を目指しているのだ。

販売は、半分は隣の人口四七万人都市・松山市の生協を通して、残り個人宅配によるものだ。農産物の年商は約四〇〇万円という。

「年金もあるし、収入は十分です。うちでは身近なものを使って、果樹

もニワトリも育てとるから、購入するものがほとんどいらんのですわ。経費がいらんことが、いちばんありがたいです」

レモン畑の一部を柵で囲って、ニワトリを十数羽放ち、除草を手伝ってもらう。雑草が食べ尽くされると、ニワトリを鶏舎に戻す。畑は、また雑草が生えるまで放置し、雑草が生えるとニワトリを畑に入れる。これを、場所を少しずつ変えながら移動させていくのである。

レモン畑の下には、木造の広くて風通しのいい土の上で放し飼いする平飼いの鶏舎がある。床には小さく切った藁を敷く。糞は藁の微生物で分解され、自然発酵するので臭いはない。それらはレモン畑に肥料として、すべて還元されるのだ。

ニワトリの餌はトウモロコシや骨粉、米糠など。一部購入したものもあるが、海で採れたヒジキ、近所のカマボコ店の魚の残り、鯉節店の鯉節の粉、蛎殻、栄養剤を作るときに残ったニンニクのかす、雑草などを混ぜて発酵させた自家製の飼料である。

### 泉精一さんの巻



イラストレーション/山本祐司

レモン栽培には、鶏舎の自然堆肥のほかに、自家製の肥料を入れる。肥料は、米糠、豆腐屋の国産大豆のおから、魚かすなどを使う。堆肥は発酵が十分に行なわれるように、近くの竹藪の腐葉土から採取した土着微生物を使う。これを糠に入れて培養し、堆肥に入れて発酵させる。

病害虫の予防は、いっさい化学農薬を使用せず、自然の乳酸菌や酵母などの微生物の力を利用し、木を健康にして守る方法を用いる。微生物の採取も身近なところから行ない、自分で培養する。ヨモギ、タケノコ、ミカン、杉など、それらの芽が出る元気なときに摘み、これをそれぞれ





「柑橘類の慣行農業では、年に10回から18回も農薬をかけるんです。これもなんとか変えていきたいですね」と話す泉精一さん。

カメに入れて黒砂糖を加えると、自然の酵母や乳酸菌が増えて発酵する。一種のお酒のようになるのだが、これを薄めて、病気や虫の出やすい時期に合わせて木にかけるのだ。「リサイクルし、地域にあるものを循環させるといふ考えなんです」

レモン畑をよく見ると、どの木も脇に出た大きい枝が折れて横になって生えている。

「木はそのままにしておく、どんどん上に伸びる。ところが、このあたりは台風がひどく、三年に一度は大きな被害に遭うんです。三年前にレモンの木がほとんどやられて、壊滅しかけた。レモンはもう、やめようかと思うとつたくらいです。ところが折れて倒れた枝から、ようけレモンが実って、風の被害に遭わん。それだつたらと、最初からノコギリで枝を少し切つて、途中から横にしてしまおうと思ひましてな。これがええ具合に実がなつて、台風の被害も受けにくくていいんですわ」

## トンボもホタルも いなくなつた

精一さんは、一九三〇年生まれ、五人姉弟の長男。父親は建設業で、そのかたわら農業を営んでいた。精一さんが七歳のときに父親が亡くなり、幼少から母親の農業を手伝つた。伊予市伊予農業高等学校を卒業し、専業農家となる。二五歳で結婚。当時は、ミカン、サツマイモ、麦、除

虫菊、生姜などを栽培。それに搾乳する牛を四〜五頭飼つていた。

そして六〇年に、農協中央会とNHK共催の全国優秀農家選定に応募。四国の最優秀代表に選ばれ、全国大会では準優秀賞に輝く。受賞理由は酪農で搾乳し、牛糞はミカン作りの堆肥に利用する農業経営。現在の循環型農業と同じ形態である。

ところが、このころから機械化と農薬や化学肥料を大量に使う近代農業が、国や農協指導で推進された。瀬戸内海の島も例外ではなかった。牛は搾乳機が導入され、牛乳を大量に集める施設が必要になり、大型化できるところしか残れなくなった。大量生産の牛乳が出回ると乳価は下がり、四〜五頭の牛では採算が合わず、牛飼いは消えていった。泉さんもやめた。

しかし泉さんは近代農業を信じ、農協では指導的立場にもあった。中島果樹園芸同志会の支部長、ミカンを選別し大量出荷する第二共選場の運営委員長でもあった。

「国は規模拡大を奨めていました。農薬をかけ、コストを下げるのに化学肥料を使うことが宣伝された。除草剤から始まり、農薬をたつぷり使つた。殺虫剤も、パラチオンもホリドールも使いました。よく効くというので、すべて化学肥料にした。トンボもホタルもいなくなつたが、いなくなることはいさげになり素晴らしいと思つていた。ミカンはピカピ





レモン栽培の見学に、韓国やタイなどからも視察団が訪れる。

カのものできた。きれいなミカン  
は儲かるという感覚だった」

そんなころ泉さんは、有吉佐和子  
さんの農業汚染を書いた「複合汚染」  
を読み驚愕する。自分の周辺でも  
次々と異変が起こり始めていた。

「あのころ、癌と結核以外は、ほと  
んどというくらい病気が続いた。心  
臓、肝臓、肋膜。あとで考えると農  
薬が原因だったんでしよう。生産は  
あがったが、夜になると有機イオン  
で、毎晩皮膚が痒くなってました」

同じころ、長女が脳水腫のうすいしゅになり、  
満四歳で亡くなった。

「当時は町議会議員もしてましたが、  
豚の糞尿問題が起こりました。豚を  
飼っていた農家では、尿は水洗で海  
に流し、残った糞は畑で燃やすとい  
うことをしておった。ところが糞に  
ハエが大発生し、島中がハエで被わ

れたんですわ。それこそ、どの家も  
一リットルも殺虫剤を使わんといか  
んくらい、ハエで一杯になった」

そして決定的な出来事が起こる。  
島の土壤検査をしたところ、農業と  
化学肥料の使い過ぎで砂漠化し始め  
ていた。有機質はなくなり、酸度の  
高い疲れきった土地になっていた。

「ミミズもミツバチもいない。レイ  
チエル・カーソンの「沈黙の春」そ  
のままでした」

## 5年かかった土作り

さらに追い討ちをかけるように、  
全国で生産規模が拡大されたミカン  
は、供給過剰となり暴落し始めた。  
泉さんは一大決心し、有機農業に転  
進する。ハエで問題になった養豚農  
家の糞をもらい、それで堆肥を作り  
始めた。七五年のことである。それ  
は、泉さんが賞をもらった当時の循  
環型農業に戻すことだった。

「もうひたすら土作りでした。ミミ  
ズがないので、滋養で養殖してい  
るところがあると聞いて取り寄せた。  
ミツバチがおらんと、日向夏はなか  
なか受精しない。それで女房と二人  
で、花粉をつけたりしました」

そして雑誌で「日本有機農業研究  
会」発足の記事を見付け、すぐに入  
会。機関誌で勉強を始めた。

「もう必死でした。命がけでした」  
糞を手作業で切り返し、自然発酵  
するまで堆肥を作り、それを畑に入



ニワトリは妻の嘉代美さんが担当している。



果樹栽培やニワトリ飼育は、1.5ヘクタールの急斜面を利用。

れた。土をよくすると言われる発酵  
促進の資材も、いろいろ試してみた。  
一年目、大量のダニが発生した。

「もう辛抱でした。自然は持ちつ持  
たれつ、特別なことをしなくとも、  
うまくバランスをとっている。農業  
をかけるから虫が異常発生すると書  
かれた「日本有機農業研究会」の機  
関誌の言葉だけが頼りでした」

一年目でようやく、半年作の三割  
のミカンができ、三年で半分。今度  
は木の養分を吸いつくす矢ノ根貝殻  
虫が大量発生した。これはマシ油  
で防いだ。それでも自然の回復を願  
い、堆肥作りをした。五年目でやつ  
と土は戻り始め、収穫ができるよう  
になった。ミミズやクモも出てきた。

この間、農協へ出荷できないので、  
親戚や友人たちのツテで、東京の宅  
配業者にしばらく出荷した。

七九年、熊本で行なわれた「日本  
有機農業研究会」全国大会に初めて  
出席。ここで愛媛にも有機農業者が

いることを知り、仲間ができた。そ  
して松山で農家一〇軒、消費者八〇  
〇人の生協が発足。こうして地元  
の農家と、消費者の連携した有機農産  
物の販売組織が誕生する。農家と消  
費者の交流も生まれた。

泉さんは一人ずつ、地道に語りな  
がら仲間を増やした。現在、中島で  
は、ようやく有機農家が八軒になっ  
た。このうち二軒は、東京と兵庫か  
ら来た若者が泉さんの家で研修を受  
け、地元で独立した人である。消費  
者や研修者が来て語れるようにと、  
有志のカンパで、島の台風で倒れた  
杉の木を使い研修施設もつくった。

「ここからもっと仲間を増やして、  
将来は「有機の里」にしていきたい。  
それが私の夢です」

泉さんは、目を輝かせた。

写真撮影／筆者  
かなまる ひろみ・一九五二年生まれ。ライター&  
エディター、コーディネーター。最新刊は「こだわ  
りの有機食品産直ガイド」(日本文芸社)。